

同志社キライ

講演	高田 太〔たかた・たい〕
講師紹介	梅花女子大学心理こども学部こども学科講師 梅花女子大学宗教主事 日本キリスト教団同志社教会副牧師

タイトル

ただいまご紹介に与りました高田です。昨年度から梅花女子大学と同志社教会で働いています。平日は大学でキリスト教学の授業をしたり、チャペル・アワーをしたり、そして日曜日は教会で月に1回、説教を担当しております。しかし、まだまだ若くてキャリアもない私のようなものに、どうしてこういう大役が回ってきたのかと思うのですが、今年からキリスト教文化センターの所長を務めておられる横井先生は、同志社教会員ですから、その繋がりで私に声を掛けやすかったのかもしれません。私、これまでに講演などしたことがありませんから、お引き受けすべきかどうかと悩みましたが、勢い、受けてしまいました。

これまでの講演記録を見てみれば、そうそうたる先生方が講師を務めてこられていますし、そこで語られているのも、新島襄や同志社についての深い学識が中心でした。私の専門は、組織神学といってキリスト教の教理や思想に関する分野ですし、新島襄や同志社についての学識を披露することはできません。それでどうして私なのかと考えた時、やはり私が同志社中学から高校、大学、大学院、そして今は同志社教会と、ずっと同志社に関わり続けてきたというのがあるのだらうと思いました。中学に入ったのが1990年ですから、26年間、同志社に関わり続けてきているということになります。ですから、その経験から同志社スピリットについて語れということだろうかと思いました。それでどういう講演題にするかという時、自然と「同志社キライ」というのが出てきたのでした。26年間の私と同志社との関わりは、24年間で生徒、学生として、教育を受ける側としての関わりでしたが、これを思い起こしてみてもうなってしまいました。

このスピリット・ウィークを企画しておられるキリスト教文化センターの主要な催しとしてはチャペル・アワーがありますが、近年そちらではインパクトのあるタイトルが好まれているようですから、何というかインパクトのあるタイトルをつけねばなるまいかという圧力も感じてもいたのでした。私を講師に抜擢してくださった横井先生は「少し焦りました」とおっしゃっていました。すみません。しかし、そんなふうに私を動かしたのは、一つはそういうキリスト教文化センターのタイトルに関する姿勢であり、もう一つはこのスピリット・ウィークの講演集の表紙でした。そこにはこう書かれていました。「傀儡不羈なる書生ヲ圧束せず」。「傀儡不羈」というのは難しい言葉ですが、そしてまた後で語りますが、何というか、ある意味では学校に反発して、時にお行儀がよくなく型をはみ出していような学生ということです。そしてそういう学生を同志社は抑圧したり束縛したりしない、と言っているのです。そう言われれば、「傀儡不羈」をやらなあかんのかいなと思われて、こう、型にはまらない、反体制的なタイトルを選ぶように動かされたわけです。

いずれにしても、そういうタイトルが出てくるというのは、私の「同志社」や「同志社スピリット」というものに対する両義的な気持ちを示すのかもしれません。あの、もちろん、言い逃れをするための工夫があるのですが、これについては後で語ります。

私と同志社との関わり

そういう具合ですから、私と同志社との関わりを中心に自己紹介をさせていただきたいと思います。私と同志社との関わりは中学校からです。実家は山科の貧しい電気屋で、両親は大学を出ていないという家庭だったのですが、子の教育には力を入れようとしたようで、小学校の時には塾に通わされ、お受験をさせられました。いろんな学校を受験させられましたが、我が家のそうした教育政策を主導していた祖父が同志社がよろしいというので、同志社に入ることになりました。

この祖父ですが、神戸出身で、通信兵として戦争に行って帰ってきたら、町が焼け野原になっていたという世代の人です。92歳。その焼け野原の神戸で、天幕を張って伝道していたキリスト教のグループに関わるようになって、そこで洗礼を受けていました。その後、結婚してから京都に来ると、どうも良い教会が見つからなかったようで、教会に通わず、洗礼を受けていることも家族には内緒にしていたのですが、そういう背景もあって、孫をキリスト教の学校に入れたかったようです。小学校6年生で、自分の進路選択に悩む知恵もないので、私はその祖父に唆されるままに同志社中学に入学し、3年間、まだ今出川キャンパスにあった中学に通いました。そうして自然の成り行きとして同志社高校に進学したのでした。

私が一番同志社キライを感じたのはたぶんこの高校時代だったと思います。高校時代にもなると、人も一人前の自我をもつようになりますし、社会のことがわかってきます。どうも、家は貧しいらしい。同志社に來ている同級生の多くはお金持ちらしい。参観日にもなれば、BMWなどの高級車が並ぶ。父親は電気屋の事務用のライトバンで来ている・・・。高校特有の友達グループみたいなものにもあまり馴染めず、私は高校の外でギターを弾いて、他の学校の人々と一緒にバンド活動をしていました。またこの時代の高校の礼拝などは、とても参加者の態度が悪くて、賛美歌を歌うと言っても誰も立たないし、歌わない。しかし先生方も、同志社は自由を大事にするところということで、あまりそれを注意するわけでもなく、というような印象でした。

詳しくは語りませんが、とにかく高校の3年間、あまり同志社に深入りしないようなスタンスでやって、そうして大学に進学する時に、先の祖父がまた、神学部がいいんとちゃうかと唆しました。神学部は自由なカリキュラムを売りにしていて、当時、必修科目はなんと4単位のみでした。当時のひねくれた私は、高校のキリスト教教育に疑念を抱いていて、高校3年生の頃にはフランスのポストモダン思想とかいうのが流行っていたのですが、そういうのを読んで、そこからニーチェの「神は死んだ」という思想を知って、キリスト教を批判的に見ていました。キリスト教の授業のレポートなんかでも、キリスト教批判について書いたような覚えがあります。今から思えば青年期特有の反抗なのかもしれないし、あるいは自由や傀儡不羈なる学生を束縛したのが同志社だと習っていたので、ならばそういうことをやってやろうかと思っていたのもあったかもしれません。

そういう関連で、大学では哲学を学んでみたいと思っていたのですが、同志社高校では成績の良いものから好きな学部を選ぶというシステムで、私は成績が非常に悪かったので、あまり選択の余地がありませんでした。しかし、その年は神学部の希望者がいないということで、そして祖父も私を唆していたので、神学部に行くことにしました。自由なカリキュラムだし、キリスト教と哲学の関わり、キリスト教批判についても学べるのではないかと、思ったのでした。そうして神学部に入りました。

高校の時は下から数えた方が早かった成績が、神学部に入ってみれば嘘みたいに良くなりました。好きなことを勉強して、思ったことをレポートなどに書けば良い成績がつくというのは気持ち良いものでした。本来の意味での自由というのは、そこで味わったような気がしました。高校まではやはり何かの枠に囚われていた。大学になるとそれがなくなって、勉強についても人間関係についても本当に自由になる、そういうのは皆さんも感じておられることかもしれません。そうして卒業論文では、哲学者ハイデッガーの『存在と時間』という本に取り組みました。その本の中でハイデッガーは良心について語っていますし、自由についても語っています。

その後は、引き続き研究を続けたいと思って、大学院に進学することにしました。学部生時代、まあ、神学部に来たのだから、そしていろんな先生が教会のことを言うから、教会にも行ってみなくてはなるまいかと思って教会を訪ねたこともありましたが、どうにも自分には合わないように思われて、結局、教会に通うということはありませんでした。しかし、その大学院の面接の席で、ある先生が私に、「君は教会には行っておらんのかね」と聞かれました。私は正直に、「いえ、行っていません」と答えると、その先生は、「なら大津教会に来なさい、連れて行ってあげよう」とおっしゃったのでした。これには背景があって、実はその先生と私は同じマンションに住んでいて、その先生も私もどこかでそれを知っていたのでした。先生にそんなふうに誘われたら行かねばなるまいかと考えて、その先生が行っておられた大津教会を訪れました。そうすると突然の訪問にもかわからず、礼拝後丁寧に教会の建物を案内してくださいました。そうして私は大津教会に通うようになったのでした。隠れキリスト者だった祖父はしめしめと思っていたことでしょう。そしてどうしたことが、もう思い出せないのですが、その年のクリスマスに洗礼を受けてキリスト者になりました。祖父が喜ぶどころか考えたのでしょうか。その日のことも忘れてしまっていますが、しかし、雪の深い日の礼拝後の夕方に、先の先生がわざわざ電話を掛けてこられて、「おめでとう」と言ってくださったのは覚えてます。

そうして教会に通いだして、修士課程では哲学者カントの宗教思想を研究しました。カントもまた自由に関する思想で知られていると思いますし、良心の問題もその思想に深く関連しております。結局博士論文もカントで書くことになったのですが、改めて考えてみれば、自由や良心という同志社的な問題設定が自分の中に生き続けてきていて、それは中学からの同志社との関わりで与えられていたものだったのだと気付かせられるところです。

そうして修士論文を提出し、さらに勉強を続けたいと思って博士課程に進みました。博士課程に入ると、さすがに「神学部であるから哲学者を扱うのはよろしくない、神学に取り組みなさい」と言われて神学者の組織神学に取り組んだのですが、どうにも研究が順調に進みませんでした。教会で育ってきたのでもないし、当時浅はかな信仰しかもっていなかった私は、神学者が何を問題にしているのがよく分からなかったのです。そんな中、教会の役員に選ばれたり、また立ち上がったばかりの一神教学際研究センターの研究員をさせてもらったりで、忙しくてあまり博士論文に取り組むことができず、時間が過ぎていきました。しかし、論文を書けという圧力を感じるようになって、博士課程に入ってから4年目くらいでしょうか、とりあえず何か発表せねばならないということで、再びカントに取り組んだのでした。

ようやくに研究成果を発表できた頃、大津教会の牧師を務めておられた望月先生から、教師検定試験を受けて教会の伝道師にならないかとの薦めを受けました。すでに3年間、役員として大津教会に深く関わるようになっていました。教会というところの特徴は何というか、人の死に関わる機会が多いというのがあります。今の教会は高齢化していますから尚更なのですが、普通に生きているのに比べて、葬儀に出席する機会がずっと多いと思います。そしてお世話になってきた方々の死に面して、深く感じさせられたのは、誰もが志半ばにして死んでいくことです。教会をもっと良くしたい、もっと多くの人に來てもらいたい、いや、キリストの福音を広く伝えて世界をもっと良くしたい、そう思いながら、しかしこれまで全ての人は志半ばに死んできたのです。そしてその志は、誰かに受け継がれねばなりません。

そういう具合で教会生活の中、何か教会のために自分にできることがあるならば、為すべきだと思い、牧師の薦めに従い、私は大津教会の伝道師になりました。その背後には、望月牧師が転任を決意されているらしいというのもありました。牧師の交代というのは教会にとって大変な事なのですが、その時に私として教会のためにできることがあればと思ったわけです。実際に望月牧師は1年で同志社教会へ転任され、大津教会は新しい牧師を招聘したのですが、案の定というか、引継ぎはとても大変で、私はそこから3年間、研究を中断して、教会のことに集中せざるを得なくなりました。私は、牧師になろうと思って神学部に入ったのではなかったのに、神学部では自分の研究はしていましたが、牧師になるための訓練は受けていませんでしたし、聖

書を熱心に読んでいたわけでもありませんでした。ですから、教会の仕事を果たしていくというのは最初は本当に大変でした。仕事をしながらそれを覚えていきました。それでほとんど大学に顔を出すこともできていなかったのですが、しかしそういう時期にも、大学院の指導教授の水谷誠先生は、私にドイツ留学を勧め続けてくださいました。

そうして3年が経ち、伝道師から牧師になるための試験を受けたのを契機に、私は水谷先生の勧めに従って、大津教会を離れてドイツに神学の勉強のために留学しました。もうこのあたりからは同志社との関わりと離れまして、話は省略させていただきます。しかし、いろんな留学の形があるでしょうが、私のそれは多くの出会いに恵まれた幸いなものでした。

2013年に日本に帰ってきて、留学中に書き進めていた博士論文を仕上げて提出しました。これは先頃出版もできたのですが、主題としては「カントにおける神学と哲学」ということで、何というかが神学部にながら哲学者カントを研究する中で感じさせられた問題意識をまとめたようなものです。そうして、ようやく同志社を卒業できることになったのですが、最後に一つ蹟（つまず）きがありました。卒業式のことで、博士学位を授与される者は、指定のガウンを着ろという学事課からの指示が届きました。中学から始めてここまで、同志社に決まった服を着るよう指示されたことはありませんでしたから、またかつての教師達はそれが同志社の自由を表すものだとか誇りにしていたように思いますから、私は驚きました。そのことで神学部の事務の方に噛みついて、「ふなっしーの格好をしたら駄目なんですか。じゃあ、ふなっしーがガウン着てたらいいんですか」とか言ってみたのですが、あまりご迷惑をおかけするのもし訳なかったの、仕方なしに着ることにしました。どうでもいいことなのですが、そういう反発を引き起こすような同志社的教育を受けてきていたということなのでしょう。あんまり言うと思われそうなので、黙ります。

そうしてようやく同志社を卒業できると思っていたら、先の望月牧師の計らいと、不思議な偶然によって同志社教会に招聘されることになって、こうして同志社との関わりを続けているという次第です。長々と語りましたが、ともかくもそういう人生を経て、同志社と関わり、ここに同志社スピリットを語るべく立たされているということになります。

梅花女子大学と澤山保羅（ぼうろ）

すでにいくらが、私が感じてきた同志社スピリットらしきものについて、お伝えすることができているだろうかと思いますが、そんな私が今、本務として務めているのは梅花女子大学です。同志社とも歴史的に深い関わりのあるキリスト教主義の大学なのですが、次に、この梅花女子大学について紹介させていただいて、これとの関わりで同志社スピリットについて考えてみたいと思います。

この梅花女子大学は、同志社の創立から3年後の1878年に、澤山保羅と二つの教会によって創立された梅花女学校を前身としています。創立教会である梅本町公会から「梅」を、浪花公会から「花」をとって「梅花」という名がつけられました。大阪市の中心部、中之島の南の土佐堀が発祥の地となります。

澤山保羅という人は、明治維新の後の1870年、18歳の時に勉強のために神戸に出てきて、そこでアメリカン・ボードの宣教師D・C・グリーンと出会い、1872年、20歳の時に米国エバンストンという町に留学した人です。18歳にして郷里山口を離れてグリーンのもとを訪れた澤山は、実に時代の転換期にあって、英語やアメリカの進んだ学問を身につけ立身出世を図ろうとしていました。山口、かつての長州藩は、明治維新の勝ち組でした。新政府を担う側でした。同郷の仲間達もその波に乗ってアメリカへと留学して行きます。そういう時代の空気の中、彼は半ば焦りつつも留学を決意したのでしょ。本格的な英語の勉強を始めてわずか1年のことでした。渡航の費用をなんとかかき集めて、そしてエバンストンに着いた後はグリーンの家宅に世話になりつつ、働きながら勉強を進める計画でした。一刻も早くアメリカに行かねばならない、行けばなんとかなるだろうということだったのでしょか。そうして1872年、澤山は渡米しました。エバンストンはシカゴの近く、ミシガン湖沿岸の町です。

ところが、彼の留学は新島のように恵まれたものとはなりません。英語の習得に苦勞し、また、体の弱かった彼は病に倒れることがしばしばでした。留学中に二度の手術を経験しています。さらに、先に述べました通り、その留学は国費や奨学金によるものではなく、費用は自分で支弁するものでしたから、生活も貧しかったのでした。

澤山は、渡米後4カ月という、まだまだ英語もわからなかっただろう時期に洗礼を受けています。彼は留学に旅立つ折に、父親にキリスト教には入らないという宣誓をしていましたから、驚くような速さでの転身です。しかし、これは自分が世話になっていたエバンストンのキリスト教社会、その人々に対する応答だったろうと思います。もちろんすでに神戸で英語やキリスト教については学んでいたでしょうが、この段階で教会での説教や、聖書をよく理解して洗礼を決断したというのは、私自身の留学の経験に照らしてみれば、とても考えられないと思います。わけもわからない外国人を受け入れて世話をしてくださっている方々の恩に、その愛になんとか応えたい。かといって感謝を言葉にしようにも、英語はできない。洗礼を受ければそうした方々は喜んでくださるだろうーそういう具合だったと思います。

さて、彼が当初エバンストンで世話になっていたのは、グリーンの子の兄の家だったのですが、このグリーンは金銭のトラブルを起こしてエバンストンを去らざるを得なくなります。そうして、澤山は留学の翌年からはボーテルという人の家で世話になることになりました。これは大きなショックだったろうと思います。さらに、留学して最初彼はノースウェスタン大学の予科、つまり大学入学の準備コースで学んだのですが、語学力やその他の学力が及ばず、留学の2年目からはパブリックスクールという、大学の前段階の学校に入れられることになりました。

そんなふうに勉強の進まない焦り、さらに生活の厳しさ、闘病、周りの人々に一方的に世話になっているという負い目もあったでしょう。彼は留学の3年目にワシントンの日本公使館に公費留学扱いにしてもらえないかと、また公使館勤務を斡旋してもらえないかと願ひ出るのでした。彼の留学は立身出世のためでしたから、ここに彼は最後の望みを託したので。しかしこの申し出は却下されました。

この苦難のどん底にあって道を見失いかけていた時に、この澤山のもとを、大阪からたまたま一時帰国をしていたアメリカン・ボードの宣教師H・H・レビットが訪ねます。レビットは彼に日本にキリスト教を伝えるため尽力するよう勧めました。そしてこの出会いが澤山を変えたのです。レビットとの出会いの後、聖書研究に打ち込んだ彼は、新約聖書のパウロという人物に心打たれました。それまで馬之進という名であった彼は、これによりその名を「保羅」と改めました。闘病や挫折が、エバンストンの町で彼を支えた人々の愛につつまれて、自らの弱さをことごとく自覚する中で、それが「弱い時にこそ強い」と語ったパウロの精神と結びついたとき、この馬之進はパウロの回心体験を追体験したはず。パウロも当初はサウロという名で熱心なユダヤ教徒として励んでいたのですが、あるとき復活のキリストに出会って回心し、名をサウロからパウロに改めて、その後は、異邦人、つまり外国人への伝道に生きた人でした。さらにその活動を自給で行っていた人で。彼は天幕職人でもあったので、その仕事によって収入を得て伝道し、地中海世界に新たな教会を建てていったのでした。このパウロの活動なくして今日のキリスト教はありません。与えられた状況がまさにこのパウロに結びついて、澤山は自らの使命を自覚したので。

ちなみに、新島も日本を脱国した後に、その名を七五三太から襄へと改めています。彼はこれに旧約聖書のヨセフを重ねました。ヨセフは奴隷としてエジプトに売られながらも、その夢の力によってそこで身を立てて、遂には自らの同胞を窮地から救い出すこともできた人物です。

さて、そうして使命を自覚した澤山は、シカゴの神学校での1年間の聖書の学びの時を経て、1876年に帰国いたします。帰国した彼を、同郷の先輩は、月給150円を提示して公務員になるよう誘いました。澤山の留学は当初は立身出世のためのものでした。ですから、ここでこの誘いを受け入れれば、彼は当初の念願を果たすことができたのです。しかし、伝道者としての決意を固めていた彼は、これを固辞しました。そうして彼は、翌年の1月、大阪に新たに設立されようとしていた浪花公会の牧師となったのです。新島襄を含むアメリカン・ボードの宣教師達から按手札を受けて、1877年、彼は日本で初めての牧師となりました。新島はアメリカン・ボードの宣教師として、そこから給与と与えられておりましたが、そのようなものは澤山にはありませんでした。彼の浪花教会での給与は月わずか7円でした。それでもパウロに自らを重ねた彼は、喜んでその道を行きました。

そしてこの年、すでに1874年にアメリカン・ボード宣教師により設立されていた梅本町公会と、浪花公会が、日本人信徒の運営による女学校の設立について協議して、1878年、澤山を中心として、またこの両教会が力と資金を持ち寄って、ミッション・ボードの資金に頼らない初めての自給の学校として、梅花女学校が設立されたのでした。アメリカン・ボードからの献金を上手く用いた同志社とは対照的ですが、今はそれは置いておきましょう。新島と澤山との交流はその後も続きました。澤山は頌栄館の竣工式の時の祈禱を担当していますし、また同志社教会や同志社英学校でも説教に招かれています。新島も澤山率いる浪花教会に説教に招かれたり、また澤山が若くして死んだ後ですが、梅花女学校で講演をしています。

以上が、梅花女学校開校までの歴史です。そんなふうには大阪の真ん中から始まった女学校は、その後、豊中に拠点を移し、また戦後には茨木に土地を与えられて、そこに女子大学を作り今日までの歩みを重ねて参りました。こうした歴史を持つ梅花女子大学ですが、目下、建学の精神として掲げているのは「キリスト教精神に基づき、他者への愛と奉仕の精神を備える自立した女性を育成する」ということです。また、スクールモットーとしては澤山が愛したという聖句、マタイによる福音書7章12節「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」が選ばれています。そしてこの聖句の神髄をシンプルに表現した、チャレンジ&エレガンスを大学の特色を表すために用いています。

これらが何をいわんとしているのかということですが、女学校設立の時の成瀬仁蔵（彼は澤山の同郷の後輩で、後に日本女子大学を設立した人物です）が、こう述べています。

「或日我同志ノ兄弟同愛ニヨリテ凝結シタル梅本浪花ノ両會發論シテ曰男子ノ事ハ今コゝニ置テ論ゼズ愛ヲ培養スルノ本ハ世ノ婦女子ニ關スル大ナル矣其婦女子ヲ培養スルハ愛ナル女學校ヲ設立シ愛種ヲ以テ婦女子ナル田二時二如クハナシ余輩宜シク茲ニ志ヲ注ガザルベケンヤ」（梅花女学校開校式での演説より 成瀬仁蔵「坂地梅花女学校設立の図文」『七一雑報』3巻4号新報社 1878年 5頁）。

そんなふうには梅花は「愛なる女学校」として誕生して、これを今日まで引き継ごうとしているのです。目下の建学の精神を見てみても、そこにあるのは、「他者への愛と奉仕の精神」で、これだけ見るとわかりにくいかもしれませんが、要は愛のある優しい女性を育てたいということだと私は理解しています。あえて言えば、志の高い女性、社会のリーダーとなるような女性、そういうのを育てたいのではない。優しい女性を育てたい。スクールモットーも、チャレンジ&エレガンスも同じことを言うものです。「人が本当に何をしてもらいたいか」を考えて誰かを愛するためには、チャレンジが必要ですし、またその愛はエレガントに与えられるのでなければなりません。技術や知識、配慮に基づかない愛は単なる押しつけです。これらの特徴付けているキーワードとしては、愛、優しさ、そして自立、さらに言えば女性であることが挙げられるでしょうか。澤山の時代、女性はまだ社会の片隅に抑圧されておりましたから、キリスト教的な万人の平等に基づいた女性の自立ということは建学の精神として当然のことで、これに愛と優しさが加わるという形になるかと思います。

愛がない同志社

さて、そんなふうに見てみれば、同志社との違いがわかってくるとい、気付かされることもあります。同志社の場合は、その名の中心に志が入っていて、これをとったら「同社」と、何やらよくわからない組織になってしまいますが、同じように、梅花 [BAIKA] はそこから愛 [I] をとってしまえば実にひどいことになってしまいます。愛があつてこそその梅花ということ。こうした比較からも同志社にとって志が大事なことはわかるわけですが、その建学の精神は何だったろうかと、大学のウェブサイトを見てみたら、「建学の精神と新島襄」という項目がありました。ここでは同志社を同志社たしめる精神が語られているわけですが、これを確認してみれば、そこから浮かび上がったキーワードは、すでに語ったところありますが、自治、自立、志、良心、自由ということになるだろうかと思ひます。

さて、同じくアメリカン・ボードの会衆主義のキリスト教に連なり、また、同じく聖書の人物から名を得た創立者による梅花の観点から確認してみても、不思議に思われるというか、もの足りなく思われるのは、そこでひと言も「愛」という語が出てこないということです。あれれ、同志社に愛はなかったのかと思って、そのウェブサイトの大学紹介のところを検索してみても、一語たりとも「愛」という語は用いられていませんでした。「キリスト教主義」の説明のところにも出てこないのです。

この同志社スピリット・ウィークの過去の講演を調べてみても、「愛」という言葉はあまり出てきていませんでした。そこで強調されているのは、先のキーワードです。しかし、そうして調べていけば一つ、このスピリット・ウィークが始まった2005年の秋、愛について正面から語っておられる講演があることに気付きました。

それは当時の理事長、野本真也先生のものでした（「新島襄の会った『キリスト教』」と題する講演『Doshisha Spirit Week講演集』二〇〇五 秋学期 同志社大学キリスト教文化センター 2006年 9～45頁）。ここでは新島がアメリカで出会ったキリスト教である会衆主義教会の基本徳目が、「良心、自由、愛、自治、自立」というふうで紹介されていました。先のキーワードを思い起こせば、ここから愛がすっぱり抜け落ちていることに気付かれます。あるいは、新島がそこで暮らしたニューイングランド地方の紹介としても徳目リストが用いられており、そこではビュリタニズムとデモクラシーの伝統として、「人格の尊厳、良心、自由、平等、自主独立、自治、愛」が挙げられているのです。さらには、講演全体で「愛」という語が32回用いられています。「自由」が20回、「良心」が24回ですから、愛が強調されているのがわかります。野本先生は同志社の神学部長や理事長という重責を担われる傍らで、その超人的能力で賀茂教会の牧師を務め続けてこられた方です。この牧師が、ここまで愛を強調しておられるとおり、愛は同志社においても、その根底にあったはずの大切なものなのです。新島は、キリスト教とは何かと問われたら「愛をもってこれを買く」と答えておりました。

同志社スピリットを確認していく営みの最初に、そんなふうに関心強く愛が語られていたのに、いつの間にかそれがどこかに行ってしまった。ひょっとするとそんなふうにしばしばに同志社は愛を忘れてきたのではないのか。なるほどそうか、同志社に愛がない・・・。どうもこれが私の同志社クライの底にあるのではないのかとも思われされました。愛がないとクライになりますが、これは説明の必要がないことでしょう。

偶僞不羈

同志社は志を大事にする。また良心を大事にする。あるいは自治、自立を大事にする。これらは強力な主体の独立を意味していると思います。自分で自分を治め、自分の足で立つ能力があって、そうして建てることのできる高尚な志をもって、そして自らの良心に従って生きる。何というか、上昇志向というか、強さがみなぎっています。そういうのは、最初に紹介した「偶僞不羈」という言葉についても当てはまるでしょう。「独立心が強く、才気あふれる人物」、そんなふうに関心づけられています。また新島は次のようにも語っていました。

「我が校の門をくぐりたるものは、政治家になるもよし、宗教家になるもよし、實業家になるもよし、教育家になるもよし、文學者になるもよし。且つ少々角あるも可、奇骨あるも可、たゞかの優游不斷にして安逸を貪り、苟くも姑息の計を爲すが如き軟骨漢には決してならぬこと、これ予の切に望み、偏に希ふところである」（森中章光編『片鱗集』『新島襄集』7 丁子屋書店 1950年 204頁）。

優柔不斷でなく、安逸を貪るのでもなく、姑息の計を為す軟骨漢ではない。何事にも良心の確信によって真っ直ぐにぶつかり、時に角がありまた気骨がある、そして何より志を抱く、そういう人物がよろしいということになります。

なるほど、これがそうした学生を、熊本バンドのような「偶僞不羈」の学生を前にして困り果てている新島の口から出てくるならばよいでしょう。同志社の社員が、学生に面するに当たって、これを心に念じるならばよいでしょう。そこにあるのは、明確に語られてはいませんが、学生に対する愛です。学校に対して反抗心をもち、教師に噛みついてくるような学生であっても、忍耐をもってその個性を信頼し、成長を見守る愛がそこで求められているということです。

しかし、これが学生の口から出てきたらどうなるのでしょうか。「私は『偶僞不羈』だから、その自由を圧束するな」と。「私は自分の良心に従っている、高い志を抱いている、だから同志社はそんな私を大事にしろ」と。そして、もし学校の側から批判されたなら、「同志社は自由を大事にするのではないが、人の良心の自由を抑圧するとは何事か」と。言ってみれば逆ギレするわけです。私としまでも、講演題に「同志社クライ」なんてつけるところでそういう精神を表しているようなものかもしれませんが、やはりこれはいけないと思うのです。そこにはこういう、型にはまらない自分を受け入れよ、愛せよという圧力、強制力が表れているからです。しかし、人に愛を強制することはできません。

同志社スピリットと言う時、そういう自由精神、自分は良心に従っているのだという、ある種の高慢を意味することはなかったらうかと思います。反権力を正当化するためにそれが用いられはしなかったらうかと思います。そういう反権力に凝り固まって自らを正当化するような人々は、その傍らに自分たちのせいで迷惑被って小さくされている仲間がいることに気付くことがないかもしれません。もちろん、そうした人々は同志社への愛の故に自分はそうしたのだ、それが正しいと確信するからそうしたのだと言うでしょうけれども、そのような愛は単なる押しつけではないでしょうか。相手のあるがままをひとまず受け入れることのできない愛は、あるいは尊敬を欠いた愛は、さらに言うなら、相手に強制を加えてその自由を束縛しようとするような愛は、自己満足に過ぎないのではないのでしょうか。

真正の自由、神の愛

野本先生は先のご講演の中で、そういう自由を虚偽の自由として批判しておられました。人間のエゴのぶつかり合いになるような自由です。これに対して、新島がその遺言を作成するにあたり、これを筆記した徳富蘇峰にあえて指示してつけ加えさせた「真正の自由を愛し」という一句を引いて、これが大事なのだと語っておられます。そして、この「真正の自由」とは、イエス・キリストにおいて与えられる自由なのだとおられます。

それはどういう自由なのか、その手がかりになるのが、新島が最も愛した聖書の言葉ではないかと思います。新島はこれを聖書の中の太陽だとも言っております。すなわち、ヨハネによる福音書3章16節、「神は、その独生子をお与えになったほどに、世を愛された。独生子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。自由は出てこないじゃないかと思われるかもしれませんが、最後の一句、永遠の命というのが自由を表しています。これは死からの自由です、また罪からの自由です。そしてその自由は、神の愛によって可能となるのだと言われているのです。梅花の創立者である澤山保羅もまたこの聖句を愛していたでしょう。彼は同じ聖句の響きの中で言っております。「神は人間の罪のために、み子を死にわたし給うたことによって、その愛をあらわされた。・・・キリスト教徒であれば互に愛さねばならない。神の愛の手に支えられるとき、この世に何も悪いものはない。愛には恐れがない」（『すなわち神は愛である』と題する説教より）笠井秋生 他『沢山保羅』日本キリスト教団出版局 1977年 213頁）。

急に話が宗教的になって難しくなったと思われるかもしれませんが、かみ砕いてキリスト教の世界観を紹介すれば、神は全く自由な方で、それ故に全能で、全く正しい方です。神は人間を、自らに似せて自由なものとして創造しましたが、人間はその自由の用い方を誤り、神に背いてしまいました。また人間は神を恐れて、それ故に自分の正しさを主張して神に弁明しようとししました。そういう恐れは、神を裁きの神として、恐るべきものとして考えさせます。人間には正しさを判定する力として良心が与えられていますけれども、その良心はいつも人間に負い目を自覚させるものです。本当にそれでいいのか、と。これはハイデッガーが語るところです。人間は神に似せて作られていますから、この良心も人間に正しさの意識を与えるものですが、人間の能力は限られていますから、これに従いすることができません。これについては、「善をなそうという意志はありますが、それを実行できない」（ローマの信徒への手紙7章18節より）とパウロが嘆いております。それでも人間は、なにがしか正しさを自覚ししますから、これがぶつかり合って争いが生み出されもします。こういうことを罪の状態だとキリスト教は考えます。

さて、そんな愚かな人間を見ておられた神は、なんとか人間をその罪の状態から救いたい、自由の正しい用い方を知らせたい、なによりそんなふうに関心する神が人間を愛していることを人間に知らせたいと思われました。しかし全能の神がこれをどのように人間に知らせたのかと言えば、それは自らが人となり地上に生まれ、人として生き、人間の罪に飲み込まれて十字架につけて殺されることだったのです。

例えば、琵琶湖の沖で水鳥が網に絡まっているのを見たとき。岸にいる私はなんとか助けてやりたいと思いますが、そこに行くことができません。いや、ボートでもしつらえてそこに助けに行っても、水鳥は人間である私を見て恐れて、一層にもがいて苦しむかもしれません。どうすれば良いのか。もし、私が同じ水鳥になることができたなら、そこに飛んでいって仲間としてこれを助けてやることのできるかもしれません。しかしそうすると、私もまた網に絡まって死ぬというリスクを冒すことになります。しかし、神はそうようにされたのです。

神はその力を用いれば、圧倒的な仕方人間にその道を示し、これに従わせることができたかもしれません。しかし、そうすればそこで人間の自由は抑圧されます。むしろ、自ら低く下り罪ある人に仕えることで、そして正しく生きて罪に飲み込まれて十字架で殺されることで、神は人間にその愛と、まことの道と、そして真正の自由を示されたのです。しかし神は人間に、これを感じるように強制されるのではありません。正しい道を歩むようにと力尽くでこれを教えたのでもありません。そうではなく、罪深い人間の友となり、人が自らその道を歩むことを選ぶことのできる自由を、信じることの自由を与えてくださっているのです。ここにまことの愛がある、新島も澤山もこれを確信していたのです。新島の洗足に関する説教ではこれが力強く語られています。

「キリストにあるのは愛です。深くへりくだって弟子の足を洗う愛です。いや、足を洗うどころか人々のために命を捨てる愛です。それは真の愛があればこそできることです。キリストは世の指導者であるとともに宇宙の主でありながら、進んでへりくだって弟子の足を洗われたのです」（『キリストは弟子たちの足を洗われた』と題する説教より）現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善 2000年 162頁）。

私は、こども学科に務めておりますが、その関連でいつも思われるのは、こどもは愛をもって育てられねばならないということです。愛を与えられたことのないこどもは、人を愛することができません。近年、児童虐待や育児放棄など、さまざまところでこれが問題になっていますが、幼稚園や保育園、児童養護施設が第一に配慮すべきは、愛の中でこどもを育てることです。そして、これとの類比で考えるならば、真実に神の愛を自覚することができた時にこそ、人は誰かを愛していくことができるということです。それこそイエス・キリストが十字架に死なれたように、しかし、その十字架すらをも恐れることなく、愛を注ぎだしていくことができるのです。「恐怖は人心を転向さす力がない、けれども愛にはその力がある」（『イエスは十字架を背負っておられる』と題する説教草稿より）『沢山保羅』214頁）と、澤山が語っているとおり、愛は恐れを克服し、人の心を動かします。そしてそんなふうな愛があればこそ、新島は「偶僞不羈」な学生を愛することができるのです。すなわち、

「私は才能も学力もなく先導者となる器ではない。しかしながら、ひたすらこの日本を愛し、真の道を愛し、諸君を愛す。諸君よ、私は諸君から『先生、先生』と呼ばれることを悲しむ。・・・諸君はそれでも私を『先生』と呼ばれる。私はそれに値しない。ひたすら神意に従っているだけである」（「新島校長帰国後歓迎会での演説より」『現代語で読む新島襄』18

同志社キライ

最後にもう一つ、澤山の言葉を見てみましょう。「その民の王は、主イエス・キリストであり、つねにわれらを愛し、われらのためには、その身をささげ給うた、主の民は愛によって治められ、その君は父なる神にして、信者はその民である。われらは自由と愛によって治められ、恐怖の下に統治されていない」（『『聖なる民』と題する説教』『沢山保羅』214頁）。ここで「その民」というのはイエス・キリストが神の子であることを信じる人々、教会ということです。そしてその教会の王、キリスト者の王は、イエス・キリストで、その愛と自由によって民を治められるというのです。

これほどまでに愛が、梅花においても同志社においても重要であるにもかかわらず、学園としての梅花も同志社も学生にキリスト教信仰を強いることはしておりません。神の愛を押しつけることはしないのです。そのような愛や信仰は自由によってこそ成り立つからです。神がそうされたからです。そして新島も澤山もそれぞれに、学園とは別に、イエス・キリストを王とする教会を興し、キリスト教精神のその根幹である真正の自由と愛とをこれによって養おうとしたのです。

ちなみに「キライ」というのは、マジャール語、すなわちハンガリー語で「王Király」の意味です。ですから同志社のまことの王は、新島を愛し導いたイエス・キリストだということを言わんとするものでもあります。そのまことの愛を知ることができたなら、喜びが来たるし（喜来）、そしてまたそのように神の愛を受けとめた者は、教会から学園に帰り来たって（帰来）、同志社に愛の重要性を、真正の自由を説くべきだとも言いたいわけです。

イエス・キリストは学園同志社においては隠れた王ですが、その信仰と愛を受け継ぐために新島は同志社教会を残しました。大きくなった学園に比べればまことに小さな群れではありますがけれども、同志社のまことの根元である愛を受け継ぐと、今出川にある同志社女子大学の栄光館を中心にして活動を展開しています。皆さまにはこの機会にこの教会のことを知っていただきたいと思ひますし、また日曜日の礼拝に足を運んでいただきたいとも思っております。

差し当たり、11月20日には同志社礼拝堂において、学園と教会との共同で、同志社創立141周年の記念の礼拝がもたれます。皆さまにも是非ご参加いただいて、共に同志社のまことの王に、そしてこの王に導かれてきた141年に想いを傾けたいと願ひまして、講演を終えさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

2016年11月4日 同志社スピリット・ウィーク秋学期

京田辺校地「講演」記録